一――新任知県の試練

私は郯城県に知県として赴任する前からこの土地はきわめて治めにくい場所であることを散々聞かされていました。事実、順治十五年（一六五八）以来この地に赴任した張翼（ちょうよく）、鄧章甫（とうしょうほ）、金煜（きんいく）、馮可参の四人の知県は在任期間二年たらずで次々に解任されたそうです。

そこで新たな知県として郯城県に赴任するに当たり、私は次のように述べました。

「私はいま郯城県を治めるに当たり心を決めた。しきたりに遵えば決断のつかないことが多くなり、いきおい他人から愚弄され、少しの工夫も発揮できなくなる。それではまた前任知県の二の舞だ。必ず思い切って逆の指示を出し、事ごとにこれまでの知県と相反することをしなければならない。おおむねそこに活路が見出せるだろう」

私は北京を出発する前に郯城県の問題人物たちについて前もって周到に調べており、そこには、金剛、天王、羅刹などを自称するゴロツキ集団がいるのを知っていました。これらの自称は五大明王の一つである金剛夜叉に因んだものでしょうが、悪魔ならぬ民衆を屈服させるといった

意味では迫力あるものだったのかもしれません。彼らは郯城県下の四つの郷に二四名の仲間を配置させるとともに、県署にも手下を送り込み、県の情報を容易に探ることができました。ゴロツキ集団にとって手下たちは知県を牽制する有力な手足となっていました。

加えて上級官署から遣わされた吏役である上差の横暴ぶりはひどく、知県は彼らの勢いを虎狼のように恐れ、何かにつけて機嫌を取りました。そのため彼らを接待する無駄な出費を重ねることになりました。こういった事情は十分理解しているつもりでした。

郯城県に私が赴任することが地元にも知れ渡ると、ご多分に漏れず多くの関係者が挨拶にやってきました。その一人に郯城県出身の貢生がいました。だが私は彼に決して気を許しませんでした。彼も例のゴロツキ集団の仲間でした。私に面会を求めることで新任知県の様子をあらかじめ探ろうとしたのです。

私は通り一遍の答礼をしただけで、彼には当地の様子などについて尋ねることは一切せず、ましてや決して腹の内を明かすようなことはありませんでした。貢生は当てが外れたまま、郯城県に戻ってこの一件を地元の仲間に報告し、

「今度来る父母（ちけん）は一筋縄ではいきそうにありませんな」

と言うばかり。見栄張りであればおだてればよし、気が弱ければ脅せばよし、欲深ければ賄賂で手なずければよし、といろいろ手立てがあったのでしょうが、貢生がもたらした情報では何の役にも立たなかったのです。